

いのち 生命のにぎわいとつながり

No.91

令和8年9月

俳句の世界では「赤とんぼ」といえば秋の季語。確かに、秋には体の赤いトンボが多いようです。今号では、そんな赤いトンボたちの正体に迫ります。

千葉県 赤トンボ



図1 左列上からアキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ。中列上からマイコアカネ、ヒメアカネ、ノシメトンボ。
右列上からコノシメトンボ、リスアカネ、ネキトンボ

実は「アカトンボ」という和名のトンボはいません。赤いトンボの仲間には多様な種類があり、よく見るとみんな違うのです。この秋、あなたは果たして何種類の赤トンボに出会うことができるでしょうか？

CONTENTS

- 1 千葉県の赤トンボ 1
- 2 千葉市内における外来種アフリカツメガエルのいま 3
- 3 令和8年度スマートフォンアプリを使用した県民参加型の
ナガエツルノゲイトウ等外来水生植物分布調査等に係る説明会を開催しました 3
- 4 「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞 ～鴨川シーワールド～ 4
- 5 千葉県の外来種（オオタナゴ） 4

◎トンボってどんな虫？

トンボは、蛹にならず、卵→幼虫→成虫、という段階を踏んで成長する、「不完全変態」を行う昆虫です。不完全変態を行う昆虫は、幼虫と成虫が似た環境で暮らしていることが多いのですが、トンボの場合、そこが大きく異なっており、幼虫は水中生活を送ることが特徴で、これを「ヤゴ」といいます。トンボ目の昆虫は、全世界に約5,000種ほどおり、そのうち日本国内では200種ほど、千葉県内には80種ほどが知られています。

◎赤トンボとは何か？

赤いトンボというのはわりあい多くいます。しかし、その全てが赤トンボと呼ばれるわけではありません。「赤トンボ」という言葉には明確な定義があるわけではないのですが、分類学上は、トンボ目の昆虫のうちトンボ科アカネ属に属するものを指すことが多いのです。ですから、赤いけれどもイトトンボ科に属するベニイトトンボや、トンボ科の中でもショウジョウトンボ属のショウジョウトンボは、厳密には赤トンボではないのかもしれないということになります。特にショウジョウトンボの♂はトンボ科の中でも最も全身が赤くなるトンボで、複眼や脚にいたるまで真っ赤です。それが赤トンボではないというのはちょっとおかしい気もしますね。



図2 ショウジョウトンボ♂

千葉県内には、現在、絶滅種や迷入種を除くと、9種のアカネ属のトンボがいます。すなわち、アキアカネ、ナツアカネ、マユタテアカネ、マイコアカネ、ヒメアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ、リスアカネ、ネキトンボです（図1参照）。

◎赤トンボを見分けるには…

中でもアキアカネは、代表的な赤トンボといえるでしょう。水田、池沼、湿地などで発生し、羽化した成虫は夏の間を山地で過ごし、秋になると平地に戻ってきます。かつては県内全域できわめて普通に見られたトンボでしたが、農薬の影響などで数を減らしつつあります。

アキアカネと間違われやすいのがナツアカネですが、胸部側面の黒い筋が、アキアカネでは上に向かって鋭角に切れ上がってゆくのにに対し、ナツアカネでは途中で平らに断ち切られた形になっていることで識別できます。



図3 アキアカネとナツアカネの識別ポイント

この、胸部側面の筋の形や向きで識別する方法は他のトンボにも有効で、例えばアカネ属の中ではノシメトンボとコノシメトンボとリスアカネはかなり似ていますが、やはりこの方法で見分けることができるのです。トンボを撮影する際は、真横から写すのがおすすめです。



図4 ノシメトンボ、コノシメトンボ、リスアカネの胸部側面

◎顔でもわかる赤トンボ

一方、真横から写真を撮らなくても一目で識別できる面白い顔をしているのが、マユタテアカネとマイコアカネです。マユタテアカネは、やや暗い谷津田の奥のようところでよく見られます。顔には一対の『^{びじょうはん}眉状斑』が目立ちます。なんとなく、眉というよりは鼻の穴のようにも見えます。

マイコアカネの方は、水生植物の多い池沼の近くなどで見られますが、成熟した♂は顔が青白くなることから「舞妓」アカネの名がついています。しかし、

繰り返しますが顔が青白くなるのは成熟した♂なので、名前は舞妓さんでも実態はおじさんなのです。

◎トンボを記録しよう

ここまで書いてきたように、トンボは幼虫時代を水中で過ごし、成虫は空を飛びます。種類によって発生する環境が異なり、さらに、他の生物を捕食する肉食性昆虫でもあるので、そこにどのようなトンボがどのくらいすんでいるかを調べることは、その場所がどんな自然環境なのかを理解する大きな助けになります。

アキアカネのように、普通種であったものが減少してしまう例もあります。いま身近にたくさんいるように見えても、そのことを記録していくことは、将来、環境が変わった時に「あの時はあの種がたくさんいた」という貴重なデータとして生きるのです。この秋、野外で赤いトンボたちに出会ったら、是非、生命のにぎわい調査団にご報告ください。なお、種類が疑わしい時は、真横から撮った写真をお送り頂けると助かります。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

千葉市内における外来種アフリカツメガエルのいま

生物多様性ちばニュースレター第76号（令和5年1月発行）において、千葉市内の河川で外来種アフリカツメガエルが確認されたことを報告しました。その後も、当該河川において自然環境保全活動を行っている市民団体と協力して防除に取り組んでいます。

年に2～3回程度の調査捕獲を行っており、令和5年には一回の調査で23頭ものカエルが捕獲されましたが、その後、捕獲数は減っていき、現在では多くとも数頭ほどが捕獲されるという状況です。



また、令和4年～5年にかけての捕獲作業の開始当初は、当年生まれと思われる小さなカエルがたくさん捕獲されましたが、回を追うごとに、大きなカエルが少数捕獲されるという傾向が現れてきました。

これまでで最大の個体は2024年11月に捕獲されたもので、頭胴長は125mmに達しました。



頭胴長125mmの大きな個体（♀）

捕獲数が少なくなってきたことは、当該河川におけるアフリカツメガエルの減少を示す可能性もありますが、一方で、捕獲された大型のカエルを解剖すると体内に多数の卵を持っていました。アフリカツメガエルは一度に数百～数千の卵を産むとされており、今後、再び増加に転じてしまう可能性もあります。繁殖力が強く、口に入るものは何でも食べてしまうアフリカツメガエルは、在来生態系に大きな影響を及ぼすおそれがあります。今後も市民団体と協力して、根絶への道を探ってゆきます。

(大島 健夫 千葉県生物多様性センター)

令和8年度スマートフォンアプリを使用した県民参加型のナガエツルノゲイトウ等外来水生植物分布調査等に係る説明会を開催しました
令和8年7月24日（金）

自然保護課では、令和6年度に作成した分布図を更新し、今後のナガエツルノゲイトウ等外来水生植物の効果的・計画的な防除に資する目的で、スマートフォンアプリを使用した県民参加型調査を6月から実施し、情報を収集しています。

本説明会では、これまでに作成した分布図とアプリを使用した分布調査の内容、県による補助金の情報を県関係課から説明しました。最初に、自然保護課から1. ナガエツルノゲイトウの分布状況と防除の指針について、2. 千葉県における外来水生植物の現状と対策、3. スマートフォンアプリを使用した県民参加型調査の概要、4. 調査対象の外来種、5. 結果の共有、について説明しました。続いて、ナガエツルノゲイトウ等外来水生植物の防除に関する県の補助金等について、水質保全課から湖沼における外来水生植物防除事業補助金について説明しました。また、耕地課及び農地・農村振興課から、外来水生植物対策に活用

できる農業関係の補助金について説明しました。最後に、農業関係の普及事業について、環境農業推進課から、チラシ「難防除雑草（ナガエツルノゲイトウに注意!）」を説明しました。

説明会には、市町村や県出先機関、関係団体などから49名に参加いただきました。スマートフォンアプリで外来水生植物を早期に発見し、早期に防除へ繋げることが拡大を防ぐ最良の方法であり、県民参加型とすることで、より多くの情報収集ができることから広く県民の皆様が参加するよう関係者へのPRをお願いしました。（小島 俊介 千葉県生物多様性センター）

「みどりの日」自然環境功労者環境大臣表彰を受賞 ～鴨川シーワールド～

令和8年4月28日、令和8年度『「みどりの日」環境功労者大臣表彰』の受賞者が発表されました。千葉県では鴨川シーワールドが貴重な自然や身近な自然などの保全のため特色ある活動を推進した者に贈られる「保全活動部門」で表彰され、5月13日に表彰式が執り行われました。

鴨川シーワールドは平成22年から国内希少野生動物種シャープゲンゴロウモドキ、平成25年からは国内希少野生動物種及び国指定天然記念物に指定されているミヤコタナゴについて、系統保存を実施し、両種について県の保全活動に尽力されていることが評価されました。

この表彰は、自然環境の保全に関する顕著な功績があった個人や団体に対して、その功績をたたえとともに、自然環境の保全について国民の認識を深めることを目的に、平成11年度から行われています。

表彰をご紹介しますとともに、心からお祝い申し上げます。（佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター）



写真提供：環境省

千葉県の外来種

オオタナゴ



オオタナゴは朝鮮半島西部、アムール川から北ベトナムにかけての中國大陸東部が原産のタナゴ亜科魚類です。名前のとおり、体長が最大13cmに達する大型のタナゴです。国内で見られるタナゴの仲間では一番大きいです。国内では2000年頃に霞ヶ浦で初確認されました。観賞魚の遺棄または大陸産の淡水真珠養殖用のヒレイケチョウガイへの卵・仔魚の混入により侵入したと推測されています。

本種の特徴としては、口髭が短く、体高が高く、背^{せびれ}と臀^{しりびれ}がとて大きいことが挙げられます。また、オスの婚姻色は臀鰭の外縁が白く縁どられるのも特徴です。生息環境は河川下流域の緩やかな流れの場所や湖沼です。食性は付着藻類や水生動物等の雑食性です。産卵期は4月から7月で、在来^{せいらい}のタナゴと同様に二枚貝に産卵します。日本ではイシガイ科二枚貝類のイシガイやヒレイケチョウガイなどを産卵母貝として利用しています。寿命は長くて3年ほどです。

本種が侵入することで、産卵場所や生息場所をめぐる競争が起こる可能性が高く、在来^{せいらい}のタナゴ類に大きな影響を与える恐れがあります。釣りで捕獲することができ、大きくて婚姻色も奇麗なので持って帰りたくなる気持ちはわかりますが、外来生物法により2016年に特定外来生物に指定され、生きたままの運搬や飼育が禁止されています。また、二枚貝などの移動はオオタナゴの拡散に寄与する可能性が非常に高いため、不用意な移動は控えていただきたいです。

千葉県内では利根川流域、印旛沼、手賀沼、栗山川等で生息が確認されています。これらの場所以外で見慣れない大きいタナゴを捕獲した際には当センターまでご連絡ください。

（佐藤 哲也 千葉県生物多様性センター）



生物多様性ちばニュースレター No.91 令和8年9月30日発行

編集・発行

千葉県生物多様性センター（環境生活部自然保護課）

〒260-8682 千葉市中央区青葉町955-2（千葉県立中央博物館内）

TEL 043(265)3601 FAX 043(265)3615

リサイクル適性(A)
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。